

古代ガリア社会におけるケルトの伝統

——ガロ＝ローマ文化の形成——

正 田 隆 康

【要約】ケルト人は、紀元前四世紀の初めにはローマ、紀元前三世紀の初めにはデルフォイを略奪し、西はイベリアから東はアナトリアにまで達したといわれている。その過程で、ケルトの宗教はギリシアやエトルリアなど、地中海世界からの影響を受けながら、独自の観念を発達させてきた。彼らの宗教において、特に重要な要素は神々への信仰であり、カエサル の記述によれば、「メルクリウス」や「マルス」などのラテン語の名称を与えられた神が重視されていた。ケルト社会は社会と宗教が密接に結びついており、その考察には宗教の解明が必須である。本稿では、ローマ征服以前から、三世紀頃まで、宗教に焦点を当てて、ガリアにおけるケルト社会を考察した。ケルトの神々は、その名称がラテン語の名称を与えられたものと、ケルト語に由来するものとに分けられる。前者に関しては、考察の結果、ケルトには、メルクリウスやマルスに「対一」で対応する神は存在しておらず、土着の信仰がローマの影響により、「メルクリウス」や「マルス」といったローマ風の名のもとに収斂されて崇拝されたものであることが明らかとなった。ケルト語の名称を持つ神々の中から、代表的な例としてエポナを取り上げ、考察を加えた結果、このグループの神々は、ケルト人の動物崇拝が、地中海世界との接触により、人の姿をした神として具現化されたものであるという結論に達した。こうして、ガリアは、表面上「ローマ化」したように見えながらも、信仰が、個々人の手で保持されたことによって、ケルトの伝統が存続し続け、ローマの要素と融合し、「ガロ＝ローマ」と呼ばれる文化を生み出したと考えることが出来るであろう。

史料 八六巻四号 二〇〇三年七月

序 論

ケルト人は、一般的にはヨーロッパ鉄器文化の担い手とされ、紀元前三世紀初めには、イベリアからアナトリアに至るヨーロッパの広い地域に居住していたといわれてきた。紀元前二世紀以降、順次ローマ人によって征服され、次第にローマ化されて、アイルランドなど、所謂「島のケルト」を除いては独自性を失ったとされる。しかし、近年、イギリスの考古学者を中心に、鉄器時代のケルト人や「島のケルト」に関して、このような従来の説に疑念が提出され、議論を巻き起こしている。その議論は、「島のケルト」というのは近代の政治的意図によって、或いは、新石器時代の巨石建造物のようなモノメンタルな遺物がなく、退屈な鉄器時代研究を面白くするために捏造された、というものである。^①「ケルト」という一体性を持った文化集団の存在そのものを完全に否定する研究者もいる。^②

実際、ケルト人を学問的に正確に定義することは極めて困難である。歴史学では、ギリシア語で *Κελτοί* *Tolátou* ラテン語で *Celtae* *Galli* *Galatae* などと呼ばれていた人々のことであるが、言語学の立場では、ケルト系の言語を話す人々のことであり、考古学ではハルシュタット文化やラ・テーヌ文化の担い手であるとされてきた。しかし、これら三者が厳密な意味で一致する訳ではなく、依拠する史料によって、ケルト人の像は異なることになる。

しかし、このような批判が全面的に受け容れられている訳ではなく、言語学のほうからは反論も出されている。^③例えば、考古学者は言語資料を無視して議論しており、また、もし人の移動がなかったとするならば、何故所謂「島嶼ケルト語」がブリテン諸島に広まり、今日まで存続しているのか説明出来ない、と言語学者は主張している。確かに、ケルト人を、ケルト語を用い、鉄器文化の担い手であり、ギリシア語で *Κελτοί* など、ラテン語で *Galli* などと呼ばれていた人々とする、「汎ケルト的」枠組みに問題があることは、近年の議論によって明らかとなったものの、従来「汎ケルト的」枠組みの影響力があまりにも強かったため、それに対する反動から、近年の議論は必要以上にラディカルになっているという印

象を受ける。

では、「ケルト」をどのように捉えたらよいのか。ケルト否定論者の一人、コリスは、古典文献^④を検討し、確かに「ケルト」は存在したが、どのような判断基準で「ケルト」という言葉が用いられていたのかは不明であると述べる。^⑤ 実際、ギリシア人やローマ人が接触した、外部から見て何らかの一体性を持っていると思われる集団が存在したこと自体は否定する必要はないが、ギリシア人やローマ人の判断基準を明確に知ることが出来ないため、「ケルト」を正確に定義できないのである。^⑥ そこで、このような議論を踏まえた上で、本稿では、「ケルト」を、ギリシア語で *Keltos* など、ラテン語で *Galli* などと呼ばれており、西ヨーロッパ、特にガリアを中心にイベリアの一部や北イタリア、中欧の一部に居住していた集団として差し当たり取り扱い、検討を進めることにする。

さて、ケルト人の居住していたガリア全土は、カエサル遠征によりローマの属州に組み込まれた。そして、その後のガリアは、一般に比較的「ローマ化」の成功した地域であるといわれる。確かに、一世紀にはガリア出身の元老院議員も存在し、二世紀にはローマ皇帝すら輩出した。

その一方で、ガリアではしばしば反乱が起きている。二一年には、トレウエリ族のユリウス・フロルスとハエドウィ族のユリウス・サクロウィルが、ローマ人への負債に耐えかねて蜂起した。^⑦ 六八年には、ガリア・ルグドゥネンシスの総督、ユリウス・ウィンドクスが、翌年には、バタウィ族のユリウス・キウイリス、トレウエリ族のユリウス・クラッシクス、リンゴネス族のユリウス・サビヌスらが反乱を起こし、この反乱は七〇年まで続いた。^⑧ コンモドウス帝治下にはマテルヌスら脱走兵による反乱が起こった。この反乱は、一八七年、マテルヌスが、コンモドウスの暗殺に失敗し、処刑されることによって終息するが、^⑨ 二六〇年にはポストゥムスによってガリア帝国が樹立される。

これらの事例は、ガリアが「ローマ化」されたという通説に対して疑念を抱かせ、土着の、即ちケルトの社会がなお影響力を保持していたという印象を受ける。そこで、本稿では、ガリアにおけるケルト社会の変遷を考え直すことにより、

ケルトの実体を闡明するための手掛かりを獲得することを目指すものである。紀元前五世紀以降、ガリアはケルト人の中心地となっており、ケースタディとしては最適であると考えられる。なお本稿では、ガリアとは、西はピレネー、東はライン、南はポー川流域までの地域のことである。^⑩

ケルト社会は、一般的には王を頂点とするピラミッド型の階層社会であったと想定されており、社会と宗教との密接な結びつきが指摘されている。例えば、ミゴーはその著書の中で、ケルト美術は基本的に宗教的なものであると述べており、ヒルなどによる最近の鉄器時代研究でも、宗教と日常生活との関係は重要な研究テーマの一つとなっていて、ケルト社会を考察する際、宗教と社会とを切り離して考えることは出来ず、ケルト社会の特質を考察するにはケルトの宗教の解明が必須であることは明らかと思われる。それ故、本稿では、ローマ征服以前から、ローマ帝政期のおおよそ三世紀頃まで、ケルトの信仰に焦点を当ててガリア社会を考察する。

考察に当たっては、主として奉獻碑文を史料として用いる。奉獻碑文には一定の形式があり、最初に、奉獻する対象となる神々の名が刻まれ、その他には、奉獻者の名、身分、碑文を奉納する目的などが刻まれる。無論、全ての碑文が完全な形で残っている訳ではなく、寧ろこれら全ての項目を備えている碑文は少ない。欠損が多く、神々の名すら判然としない碑文もある。以下では、特に奉獻の対象とされている神々の神性の分析を中心に考察を進めることとなる。それにより、奉納者がその神をどのようなものとして捉えていたのか知ることが出来、ケルト人が何を信仰していたのか闡明することが出来るからである。

① Hill, J.D., "Rethinking the Iron Age", *Scottish Archaeological Review* 6, 1989, pp. 16-23. James, S., *The Atlantic Celts*, London, 1999.

② 近年のラディカルな立場については、田中美穂氏による紹介がある。

田中美穂「研究動向『島のケルト』再考」『史学雑誌』第一一一編一

号、二〇〇一、五六―七八頁。

③ Evans, D. E., "Celticity, Celtic Awareness and Celtic Studies", *Zeitschrift für celtisch Philologie* (以下 ZCP 参照) 49/50, 1997, pp. 1-27. Sims-Williams, P., "Celtomania and Celtoceptionism", *Cambrian Medieval Celtic Studies* 36, 1998, pp. 1-35. Koch, J.T., "Cel-

to scepticism: Some Intellectual Sources and Ideological Implications" *Indo-European Studies Bulletin* 9-2, 2001, pp. 1-8. ^④ 本稿で用いる古典文献とは、古代の著述家が、ギリシマ語及びラテン語で残した文献及び、それらに対する古注のことである。

^⑤ Collis, J., "Celtic Myth", *Antiquity* 71 (271), 1997, pp. 195-201.
後 Carr, G., & Stoddart, S. (eds.), *Celts from Antiquity*, Cambridge, 2002, pp. 27-33. に収録。

^⑥ Fitzpatrick, A.P., "Celtic Iron Age Europe: the Theoretical Basis", in Graves-Brown, P. et al. (eds.), *Cultural Identity and Archaeology*, London and New York, 1996, pp. 238-255.
^⑦ Williams, J.H.C., *Beyond the Rubicon: Romans and Gauls in Republican Italy*, Oxford, 2001, pp. 1-17.

^⑧ 上の反乱の詳細については、Tacitus, *Annales*, 3, 40-46. を参照。

第一章 先行研究

ローマの征服によって、ケルトの宗教の被った変化、及びその理由について、従来の研究では、ガリア征服とその後の「ローマ化」が重視されてきた。個々の問題に関して異論はあるものの、全体的にガリアでは「ローマ化」の進展により、宗教を含むケルト的要素が消滅したとされてきた。例えば、ファーガス・ミラーによれば、ガリアでは基本的には漸次「ローマ化」が進展していき、ケルト的な要素はそれとともに消滅していったとされる。近年でも、マクマレンは、アウグストゥスの時代の「ローマ化」に関して、ガリアの地域ごとの多様性を指摘し、一括りにして述べることは出来ないとしながらも、食事、服装など、日常生活の面ではイタリア化が進んでいたと主張している^①。

その一方、ローマ支配下においてもケルト的要素が存在していたことが指摘されている。この点に関して、紀元二世紀

^⑧ バタウィ族の反乱については、Tacitus, *Historiae*, 4, 12-37, 54-79, 5, 14-26. を参照。

^⑨ マテルヌスの反乱に関しては、Herodianos, 1, 10-11. を参照。

^⑩ 例えば、ガリア・キサルピナがアウグストゥスの頃にイタリアに組み込まれたり、ドミティアヌス帝期にガリア・ベルギカの一部が改組され、属州ケルマニアが設立されるなど、ローマの属州ガリアの範囲は時代とともに変化が見られるので、本稿のガリアの範囲はローマの行政区分とは異なる。

^⑪ 無論地域差などもあり、一概には言えない。

^⑫ Megaw, R. and V., *Celtic Art*, London, 1989, p. 21. 二〇〇一年に刊行された第二版でも同じ。

^⑬ Hill, J.D., *op. cit.*

に、ケルトの伝統の復興が起こったという説があり、「ケルティック・ルネサンス」と呼ばれている。アットは、ガリアの墓碑に現れるケルト名の割合を分析し、どの地域においても一世紀より二、三世紀の方が土着の名前の割合が高まり、逆に三つの名前を持つ者の割合は減少していることから、「ケルティック・ルネサンス」を支持する^②。マクマレンも土器の様式を主な論拠として、「ケルティック・ルネサンス」を主張する^③。「ローマ化」の進展を語るファーガス・ミラーすらも、アットやマクマレンの見解を容れ、ケルトの神々への信仰については、「ケルティック・ルネサンス」による復興によって説明している^④。

「ローマ化」によるケルト的要素の消滅と「ケルティック・ルネサンス」によるその復興という図式は、本稿が考察の手掛かりとするラテン語の奉献碑文によっても、一見すると、裏付けられているように見える。現存するケルトの神名が現れる奉献碑文は、その大部分がローマ帝政期に、二世紀をピークとして、四世紀までの間に作製されたものだからである^⑤。しかし、ドリンクウォーターやグレッグ・ウルフは「ケルティック・ルネサンス」を明確に否定する。土器の様式以外の点では特に伝統の復興と呼び得るような現象は殆ど見られず、碑文数の増加は、「碑文習慣 (epigraphic habit)」と呼ばれるローマ帝国の碑文数の増加と連動しているだけであり、この時期に碑文が集中していることはケルトの伝統がこの時期に復興したことを意味するものではない、という^⑥。結論としては、現在では、「ケルティック・ルネサンス」は殆ど受け容れられなくなり、筆者も同じ立場に立つ。

近年では、「ローマ化」という言葉や概念そのものについても議論がある。先に紹介した「ケルト」の議論同様、中心となっているのはイギリスの考古学者である。中でも、ウェブスターがガリアの宗教を中心にこの問題を論じている。彼女は、ガリアにおける文化変容について、ケルトの神々とローマの神々とのシンクレティズムをケース・スタディーとして用い、「ローマ化」の代わりに「クレオール化」という用語を提唱している^⑦。いうまでもなく、「クレオール」というのは言語学の用語である。単純化して言えば、彼女のいう「クレオール化」とは、クレオール語のように、異なる二つの文

化、ここではケルトとローマ、が混じり合い、新しい文化を創り出す、ということである。更に、両者の力関係は不均衡であるため、これは「抵抗的受容」であるとされる。ローマの属州の状況はまさにこの「クレオール化」に当てはまるというのである。

こうして、ガリアにおいて、ローマ化は進展していたのか否か、更にそれを問題にする前に、「ローマ化」という概念そのものについて再検討することが必要になってくるが、この問題は本稿の範囲を超えるため、これ以上立ち入ることは出来ない。しかし、「ケルティック・ルネサンス」を否定するのが現在定説となっている以上、ローマ支配下におけるケルト的要素の存在は、征服以前からの存続と見なくてはならないであろう。ローマの属州となったガリアの中でも、ガリア・ペルギカに関しては、ワイトマンやデルクスなどによって、宗教の面では、征服後にもローマ以前の要素が存続していたことが既に指摘されてはいるものの、簡単に触れられているだけであり、立ち入った検討が行われている訳ではない。そこで、本稿では、従来の研究では十分な説明が与えられてはいないこの点を、ケルトの宗教に焦点を当てることによって本格的に考察してみたい。実際、ローマ時代のガリアについては、これまで主にローマ史を専門とする研究者によって研究が進められてきたため、本稿のテーマに直接的に関わる専門的研究、特にケルト学者による先行研究は殆ど見出せない。これは、ケルト研究者の多くが言語学を専門としており、歴史学的な研究には積極的に関与してこなかったためである。そこで、まずはローマによるガリア征服によってケルトの宗教がどのような変化を被ったのか、という点を検討するために、ローマ征服以前のケルトの宗教とは如何なるものであったのか、研究史を踏まえながら整理することを試みる。特に、従来閑却されてきたケルト史の観点から、研究成果の整理を行い、本稿の議論の出発点としたい。

① Millar, F., *The Roman Empire and Its Neighbours 2nd ed.*, London, 1981, pp. 146-156. MacMullen, R., *Romanization in the Time of Augustus*, New Haven & London, 2000, pp. 85-123.

② Hatt, J.-J., *La Tombe Gallo-Romaine*, Paris, 1951, pp. 23-42.

③ MacMullen, R., "The Celtic Renaissance", *Historia* 14, 1965, pp. 93-104.

- ④ Millar, F., *op. cit.*, pp. 146-156.
 ⑤ 確実に年代決定し得るものは全て帝政期である。
 ⑥ Drinkwater, J.F., *Roman Gaul*, London, 1983, pp. 214-316. を参照。
 「碑文習慣」に 105-114' Woolf, G., "Monumental Writing and the Expansion of Roman Society in the Early Empire", *JRS* 86, 1996, pp. 22-39. を参照。本稿では「特に注記しない場合」略号 11. 4^{me} *philologique* に拠る。
 ⑦ Wells, P.S., *The Barbarians Speak*, Princeton, 1999, pp. 196-198.
 ⑧ Webster, J., "Creolizing the Roman Provinces", *AJA* 105, 2001, pp. 209-225. 彼女はケルトの女神エボナを「クレオール化」の典型

第二章 ケルト世界の展開とケルトの信仰

従来の説明によれば、ケルト文化の最初の痕跡はハルシュタット文化（第一鉄器文化）である。この頃のケルト人に大きな影響を与えたのがエトルリア人である。同時期、北イタリアではグラセッカ文化やエステ文化などの鉄器文化が繁栄していた^①。ハルシュタット文化はこれらの鉄器文化を媒介として、エトルリアの文化を吸収し、そのエトルリア文化を媒介として、また、マッサリア（現マルセイユ）との交流により、ギリシアの文化を吸収して、独自の文化を発展させた。その結果成立したのがラ・テーヌ文化（第二鉄器文化）である。

ラ・テーヌ文化は、紀元前五〇〇年頃から紀元前後のローマによる征服まで栄えた。ハルシュタット期のケルト人の中心地は、ドナウの上流、現在のオーストリア、南ドイツ、ボヘミアの辺りであった。ラ・テーヌ期になると、中心は西のマルヌ川流域、シャンパーニュ、ブルゴーニュへと移った。これは、ケルト世界の拡大と軌を一にしている。ケルト人は紀元前五世紀頃から四方へ進出し、紀元前四世紀の初めにはローマ、紀元前三世紀の初めにはデルフォイを略奪し、西は

的な例と見なしている。しかし、エボナはウエブスターが主張するような「クレオール化」された神ではないと筆者は考える。即ち第四章で見ると、ガリア語が独自の文字ではなく、ギリシア文字やラテン文字など既存の文字体系を以て記述されたように、ケルトの神性が地中海の圖像様式を以て表現されたものである。

- ⑨ Wighman, E., *Gallia Belgica*, London, 1985, pp. 158-190. 及び 14. "Pagan Cults in the Province of Belgica", *ANRW* II 18-1, 1986, pp. 543-589; Derks, T., *Gods, Temples and Ritual Practices*, Amsterdam, 1998, pp. 73-130.

イベリアから東はアナトリアにまで達した。

エトルリアと中央ヨーロッパとの交流は古く、青銅器時代から存在していた。エトルリアは、紀元前九世紀頃、独自の集団として、即ち「エトルリア人」として形成されたが、この時期のエトルリア文化は、ヴィラノーヴァ文化と呼ばれている。このヴィラノーヴァ文化の作品やその模倣は、エトルリアだけではなく、北イタリアやアルプス以北からも発見されている。ハルシュタットでも、紀元前九〜八世紀頃のものと思われる、ヴィラノーヴァ文化の前立てつき兜が発見されており、ケルト人もその形成期からエトルリアの影響を受けていたことが窺われる。エトルリアの影響は多岐に渡っているが、先ずワインやオリブオイルの流入と共に、オイノコエ、フラゴン、シトウラなど、それに関連した品がもたらされた^③。これらの品は、ケルトの図像表現に大きな影響を与えた。ケルト人は、装飾パターンとしてアカンサスやバルメツトなどの植物文様、更に人像表現をも学んだ^④。確証はないが、ギリシアの、擬人化された神像もエトルリアを通して親しんでいたと思われる^⑤。

さて、ガリアでは、こうしたギリシアの図像表現の影響を、多数作られた母子像に見て取ることが出来る。主にブルターニュとラインラントから母子像が出土しており、聖所や墓、居住地からも出土している。ギリシアでは、地母神がその母性を強調するために、母子像として表現されたが、それは次第に大地の豊穡を表すデメテル、そして抱えている子供は娘コレへと変化していった。この母と娘という女性の人生の二つの段階を示す像は、やがて、三体一組の女性、三柱神の像へと移行していく^⑦。この三体一組の女神像は、ローマを経て、後述するケルトの女神マトロナエの図像表現へ取り入れられる。マトロナエの図像表現には、赤子や襁褓などを手にしたものが見られるが、それはギリシアの母子像からの影響を物語っている^⑧。ローマ征服以前、ケルト人は神像を殆ど作らなかつたにもかかわらず、ローマ支配下で、メルクリウスやマルス、マトロナエなどの神像が多数作られたのは、このような下地があったからであろう。

このようなガリアのケルト社会と外部との交流がどのようなルートに因っていたのか、正確には分からないが、幾つか

のルートが想定されている。一つはポー川からサンベルナル峠を越え、ローヌ川、レマン湖を経て、ジュラ山脈を越え、セーヌ川やマルヌ川へ出るルート、同様にサンベルナル峠を越え、ローヌ川からライン川へ出るルート、などである。^⑨ 何れのルートでも、川が重要な役割を果たしていることが分かる。後にストラボンが、ガリアでは物資の輸送には主に川を用いると述べているように、輸送に限らず、水路はケルト人の交通の要であった。

ところで、この川の重要性は、宗教にも反映されている。ケルト人の聖所の多くは川の近く、交通の要衝にあり、泉、特に川の水源を聖所として祀っていた。このような水源信仰はローマ支配下でも存続した。ラテン語の碑文などから知られているケルトの神々の名は約四〇〇あり、そのうち約三〇〇は一度しか出てこないが、その多くは泉の聖所の女神に奉獻されたものであつて、水源信仰を示しているのである。泉の聖所からは、ケルト人による奉納物も多数発見されている。これは古典文献にも記載があり、ストラボンはポセイドニオスの伝える話として、トロサ（現トゥールーズ）の聖所と泉から、テクトサゲス族の宝物、金銀併せて一五〇〇〇タラントンが見つかったと記述している。^⑩

このような聖所の例としては、一九六八―七一年にかけて発掘された、フランス中部、ピュイ・ド・ドーム県のシャマリエールの泉が挙げられる。ここからは、数千の木製の奉納物と、ラテン文字ガリア語の刻まれた鉛板が発見された。^⑪ これらの奉納物の中には、人間の身体の一部や臓器を象った木像が多く含まれる。同様の奉納物は、セーヌ川の水源など、シャマリエール以外の聖所でも発見されており、ケルト世界で広く見られる。このような身体の一部や臓器の模型の奉納は、ギリシアやローマでも見られる現象で、一般に、その身体部位の病気や怪我の治癒のために奉納されたものと見なされている。ケルトの場合も同様で、これら泉の聖所には治癒の効能があると信じられていた。

ケルトの聖所の例として、もう一つ、フランス北部、オワーズ県のアロンド流域の斜面にあるグルネ・シュル・アロンド（Gonnay-sur-Aronde）を見ておきたい。一九七五年以来調査が行われており、恐らくその起源は青銅器時代にまで遡ると思われる。中央に一辺約四〇メートルの溝で方形に区切られた場所があり、その中心部にある穴からは、数千の動物の

骨と、二〇〇〇余りの鉄製武具が発見されている。これらの骨は、種類及び生け贄、食用などの用途に応じて分けられていた。同様の聖所は、リブモン・シュル・アンクル (Ribemont-sur-Ancre) などでも見られ、これらはケルトの動物崇拜と関わっていると思われる。ケルト人は特定の動物を神聖なものとなししていた。猪、馬、牛、鹿などである。これらの動物は、神聖なもの、或いは神そのものと考えられ、場合によっては神の変身した姿、神の使いとして崇拜されていた。

本章では、研究成果を整理してケルトの宗教と地中海からの影響を明らかにしてきた。ケルトの宗教は、ギリシアやエトルリアなど、地中海からの影響を受けながら、発展してきたのである。特に重要な点は、水源信仰や動物崇拜など、ケルト人が具体的な自然の崇拜に熱心だったことである。次章では、このケルトの信仰が、ローマとの接触によりどのように変容していったのか、検討を加える。

- ① レボント語の使用者がトラセッカ文化の担い手であったとする説があるが、これはあまりしたことは分らない。トラセッカ文化については Marinis, R.C. de, "Golasecca Culture and its Links with Celts beyond the Alps", in Moscati, S. et al. (eds.), *The Celts*, Milan, 1991, pp. 93-102, を参照。
- ② これらは鉄製、青銅製、陶製などの容器。
- ③ ケルトとエトルリアの交流に関わって Pallottino, M., *The Etruscans*, tr. by J. Cremona, London, 1974, pp. 94-101, Adam, R., et al., "Les relations transalpines", in *Les Etrusques et l'Europe*, Paris, 1992, pp. 180-195, Bouloumié, B., "La diffusion du vin en Europe centrale et nord-occidentale", in *Les Etrusques et l'Europe*, Paris, 1992, pp. 196-199, Foresti, L.A., "L'Italie et l'Europe centrale: les temps protohistoriques", in *Les Etrusques et l'Europe*, Paris, 1992, pp. 158-167, を参照。
- ④ ケルト美術におけるエトルリアの影響については Kruta, V., "Art etrusque et art celte", in *Les Etrusques et l'Europe*, Paris, 1992, pp. 206-213, を参照。
- ⑤ ローマ人は、擬人化された神像をエトルリアから学んだと考えられる。平田雄一「ギリシアとローマの狭間——エトルリア」『世界歴史図』岩波書店、一九九八、二二八頁を参照。なお、Pallottino, op. cit., pp. 140-147, も参照。
- ⑥ ガリアの母子像については Coulon, G., *L'enfant en Gaule romaine*, Paris, 1994, を参照。
- ⑦ 「ギリシアとローマの狭間——エトルリア」『世界歴史図』岩波書店、一九九八、二二八頁を参照。
- ⑧ 図 2-25, Esparandieu, É., *Recueil Général des Bas-Reliefs, Statues et Bustes de la Gaule Romaine* vol. 10, 1928, No. 7638, 43-44°
- ⑨ Pauli, L., "The Alps at the Time of the First Celtic Migration", in Moscati, S. et al. (eds.), op. cit., pp. 215-219.
- ⑩ Strabon, 4, 1, 2.

⑪ Strabon, 4, 1, 13.

⑫ 我が国ではゴール語と表記されることもあるが、これは主にガリアで用いられていた言語であるので、本稿ではガリア語と表記する。なお、ガリア語碑文には、ギリシア文字、ラテン文字、エトルリア文字の三種類の表記がある。ガリア語については、Dotin, G., *La langue*

gauloise, Paris, 1920, Meid, W., *Gaulish Inscriptions*, Budapest, 1992, などを参照。

⑬ じれらの奉納物について、Romoëuf, A.-M., & Dumontet, M., *Les ex-voto gallo-romains de Chamalières (Puy-de-Dôme)*, Paris, 2000, を参照。なお、この鉛板については後述。

第三章 ケルトの信仰の変容——ラテン語の名称を持つ神々

ローマ征服後のケルトの信仰の変化について、本格的に考察を始めたい。通常、ケルトの神々は二つのグループに分けられる。一つは「ローマ風解釈」^①によってローマの神の名、或いはラテン語の名称を与えられた神々である。もう一つはその名称がケルト語に由来する神々である。本稿でもこの分類に従い、先ず前者から検討する。

従来の研究で最も重視されてきた史料の根拠は、次のカエサル^②の記述である。

彼ら（ガリア人）は神々のなかでメルクリウスを最も崇拜している。その像は非常に多く、この神は全ての技術の発明者であり、道と旅行者を導き、金儲けや交易に対して、最も大きな力を持っていると信じられている。この神の次には、アポロン、マルス、ユピテル、ミネルウアを崇拜する。これらの神々については、他の人々が考えるのと全く同じように考えている。アポロンは病気を追い払い、ミネルウアは工芸や技芸の基礎を伝え、ユピテルは天の支配権を持っており、マルスは戦争を支配している。^③

ここでは、メルクリウスなど、五柱のローマ風の神々についてその機能が分類されている。そこで、メルクリウスとマルスを、このグループの神々の代表的な例として取り上げ^④、奉献碑文に現れる、神々のエピセツトを分析することによってこのグループの神々について考察してみよう。

エピセツト (epithet) とは添え名の意で、語源はギリシア語のエピテトンであり、ホメロスなどでは、枕詞のように用いられて、神々や人、物などを修飾する。例えば、「アイギス持つ」アテネ、「アルゴス殺しの」ヘルメス、などである。

ドイツの学者達は、ケルトの神の添え名と異名 (Beinamen) とを区別する場合があるが、実際には両者が明確に分けられる訳ではなく、添え名が異名か判別し難いこともしばしばである。本稿では、これらを区別しないが、異名は、「添え名」とは若干意味が異なるので、本稿では、これらをまとめて「添え名」とせず) エピセツトと呼ぶ。こうしたエピセツトは古典史料に現れる場合もあるが、多くは奉獻碑文から知られる。エピセツトは神々の神性を端的に表しているものであるから、奉獻碑文に現れるエピセツトを分析することによって、奉納者がその神の神性を、どのようなものとして認識していたのか知ることが出来るであろう。

なお以下の考察で触れるエピセツトは、筆者がラテン碑文の中に身を沈ませ、『ラテン碑文集成』に収録されている碑文を博搜した結果得られたものを、筆者なりに整理し、分析したものである。同書刊行後に発見された碑文や、ガリア・キサルピナ出土の碑文に関しては必ずしも遺漏無しとしない。しかし、それらの碑文数は本稿で精査したものに遠く及ばず、以下の考察から得られた結論に変更を迫り得るものではないと思われる。無論、エピセツトを利用した研究は過去にも存在するが、本稿のように、エピセツトを考察の中心に据え、網羅的に整理分析を加えている訳ではない。

先ず、メルクリウスから見てみよう。メルクリウスのエピセツトは四〇種類以上が知られているが、これらは三種類に分類することが出来る。動物に由来するもの、神性を示すもの、部族・地域の主神・守護神を示すもの、である。動物に由来するものは artaios (artos)「熊」^⑥、gebrinus (gabro)「山羊」^⑦、moccus「猪」^⑧、豚」^⑦の三つがある。これは狩猟の神を表しているともいわれるが、動物崇拜の名残であろう。神性を示すものは、cimiacinus「旅人の守護者」^⑨、cissonius「富」^⑩、toutenus (touenus)「儲け、利益、獲得」^⑪、viducus^⑫、visucius (visu「知ってゐる」)^⑬、などである。これらは先のカエサルの記述と一致している。しかし、エピセツトの中で最も種類の多いのは、部族・地域の主神・守護神を示すものであり、例を挙げれば、Arvernorix「アルウェルニ族の王」^⑭、Magniacus vellannus「Magniaconの王」^⑮などがある。この他、エピセツト中にはつきりとは示されていないものの、出土地の偏りなどから、特定の部族・地域の主神・守護神と考えられ

るものに、*dumiatius* (デュイ・ド・ドームの守護神)^⑩ などがある。

マルスはメルクリウスより多い、七〇種類以上のエピソードを持っており、それらは神性を示すものと部族・地域の主神・守護神を示すものに分けられる。神性を示すものには、*albiorix* 「世界の王」^⑪、*barreces* (*barrex*) 「最上の、最高の」^⑫、*cicollvis* 「偉大な守護者」^⑬、*dunatis* (*dunum* 「取り囲むもの」守護者)^⑭、*leherennus* 「第一人者」^⑮、*rigisamus* 「高貴な、強きもの」^⑯、などのように至上者を示すものと、*canulus* 「強さ、力のある」^⑰、*carrus* 「戦車」^⑱、*caturix* 「戦争の王」^⑲、*segomo* 「勝利者、強きもの」^⑳、*vicinus* 「戦」^㉑、などのように戦争に関するものがある。この他に、*leucetius* 「雷光、閃光」^㉒、*leucimacrus* 「輝き」^㉓、*mullo* 「輸送の保護者」^㉔、*nodons* 「捕まえる者、狩人」^㉕、などがある。しかし、メルクリウス同様、最も種類の多いのは部族・地域の主神・守護神を示すものであり、*nabelicus* 「Nesque 谷の守護者」^㉖、*vincius* 「Vence の守護神」^㉗、などが例として挙げられる。この他、エピソード中にはつきりとは示されていないものの、出土地の偏りなどから、特定の部族・地域の主神・守護神と考えられるものに、*lelhunnus* (*Aire* の守護神)^㉘、*lenus* (トレウェリ族の主神)^㉙ などがあり、前出の *cicollvis* 「偉大な守護者」もコート・ドールの守護神と考えられる。その他に、*Esus*、*iovanucarus*、*Teutates*、*vellaunos* という四種類のエピソードは両神に共通している。また、コメンタ・ベルネンシアと呼ばれている、一世紀のローマの詩人ルカヌスに対する著者不明の古注には、以下のような記述がある。

メルクリウスはガリアの言葉ではテウタテスであり、彼らの間では人の血で崇拜されるといわれる。テウタテス・メルクリウスは、ガリア人の間では以下のように宥められる。半分水で満ちた樽へ人の頭が投げ込まれ、その中で溺れさせる。ヘスス(エスス)・マルスは以下のように宥められる。流血のために四肢を切り離すまでずっと、人が木に吊される。タラニス・デイス・パテルは、彼らの間では以下の方法で宥められる。木製の桶の中で人々が焼かれる。次に私達は他のところで、同じ箇所に関する別のことを見出す。テウタテス・マルスは「恐ろしい血」によって宥められる。なぜなら、彼の命令によって戦いが助けられるからで

あり、また、以前にはガリア人はこれと別の神々にも人間を犠牲に捧げる習慣だったからである。彼らは、商人によって崇拜されているので、ヘスス（エスス）・メルクリウスを信仰している。そして、戦争の守護者であり、天の神々の中で最も高貴なタラス・ユピテルは、以前には人間の頭によって宥められる習慣だったが、今では家畜を喜ぶ。^⑭

ここでは、先ずメルクリウスとテウタテス、マルスとエススが同一視されているが、両神が入れ替わっている説も紹介されている。エピセツトによつて知られる両神の神性は、カエサルやコメンタ・ベルネンシアなどの記述と一致する面もあるが、両神に共通の面も見られるのであり、カエサルが述べているようには明確に機能を分けることの出来ないグレーゾーンが存在している。従つて、カエサルやコメンタ・ベルネンシアの記述は、一面では正しいが、両神の神性について全て正確に述べている訳ではなく、エピセツトから知られる両神の神性はより多様であるといえるであろう。また、両神ともエピセツトの中で最も多いのは部族・地域の主神・守護神を示すものである。このことは両神の神性の本質は、部族・地域の主神・守護神であるということを示していると考えるのが妥当であろう。

従来の研究では、ケルト人が重視していた神について、カミーユ・ジュリアン以来、カエサルの記述に基づき、メルクリウスが主神に当たるとされてきた。^⑮その一方、ケルトの神々の間には、明確な機能分化が見られないことがショーステッドやテヴノなどにより指摘されている。^⑯また、このメルクリウスは、アイルランドのルー神^⑰と対応するとされてきた。この見解が最初に出されたのは、ダルボア・ド・ジュバンヴィユの著作である。彼は地名に「Eborac」という要素が頻出すること、アイルランドのルグナサッド（Lugnasad）とルグドゥヌム（現リヨン）でのアウグストゥスの祭儀の日付が、共に八月一日で一致すること、ルーのエピセツト samildanach がカエサルのメルクリウスについての記述、「全ての技芸の発明者」と一致すること、の三点を論拠とした。ヤン・ド・フリースやポール・マリリー・デュヴァル、マッカーナなどによるその後の研究においても、この見解が概ね踏襲されてきた。^⑱これに対して、メルクリウスとルーとの対応関係に疑問を呈したのがマイヤーの研究である。彼の見解では、ジュバンヴィユの根拠三点を批判し、そもそも地名は語源が曖昧で

あり、ルーは主に地名に現れるだけで、碑文に現れるのは極めて稀であるのに対し、メルクリウスは碑文、画像表現ともに豊富であること、ルグナサッドとルグドゥヌムでのアウグストウスの祭儀とは起源が異なること、ルーのエピセツトとカエサル^④の記述も同様に起源が異なること、を述べる。何れもメルクリウスとルーとの対応関係を支持せず、メルクリウスの元となった神を探し求めるのは無意味なことである、とマイヤーは主張するのである。このマイヤーの研究により、従来のメルクリウスに関する説明は否定され、問題は白紙に戻された。

本稿ではメルクリウス、マルス両神ともその神性の本質は、部族・地域の主神・守護神であることを明らかにしてきたが、メルクリウスやマルスがケルトの神と一対一で対応していないのであれば、それぞれの名称で表されているのは一つの神ではないと考えることは出来ないであろうか。元来、それぞれの部族、地域で信仰されていた主神・守護神が、ローマと接触した際、主神・守護神という共通の機能の故に、ローマ人の目には同一の神と映った。ローマ人はその神を「ローマ風解釈」によってメルクリウス、或いはマルスと同一視し、そのように記述した。後になってラテン語を学んだケルト人は、自分達の神をラテン語ではメルクリウスやマルスと呼んでいることを知り、奉献碑文にはそのように記し、画像表現でも古典の様式を採用した。しかし、それでは自分の部族と他の部族の神の違いを表せないため、地名がエピセツトとして付与された。メルクリウスとマルスのどちらと同一視されるかは、その接触の状況や部族の性格などの要因によって変わつたのであろう。つまり、メルクリウスもマルスも、多数の土着の神々を糾合しており、いい換えれば、土着の信仰がローマの影響により、「メルクリウス」や「マルス」といった名のもとに収斂されて崇拜されたのである。メルクリウスやマルスに付与された、多様なエピセツトはローマ以前の信仰の名残である。このように考えれば、メルクリウスやマルスのエピセツトに見られる多様性、メルクリウスとマルスとの共通性、両者を明確に区分することの出来ないグレーゾーンが存在することも矛盾なく説明出来る。

筆者のこの見解について、別の面から補強したい。メルクリウスとマルスの両神は古典には現れない複数の配偶神を持

っている。メルクリウスはロスメルタ、マイア、ウイスキア、更に碑文では確認出来ないが、レリーフでは、ウエヌスやミネルウアを伴っているものもある。^{⑤①} マルスもネメトナ、リタウイスという女神を配偶神として持っており、レリーフではダイアナやミネルウアを伴っているものもある。^{⑤②} ギリシア神話では、ゼウスが複数の女神や女性と交わっている例などがある。^{⑤③} 従って、メルクリウスやマルスが複数の配偶神を持つていることも、ギリシア・ローマ神話の影響と見る事が出来るかもしれない。しかし、別の解釈も可能である。つまり、元々それぞれ別個の神がロスメルタやマイアといった女神と対で信仰されていたのだが、ローマとの接触によりメルクリウスやマルスがもたらされた際、男神が、メルクリウスやマルスと同一視された。その結果、メルクリウスやマルスが複数の配偶神と共に現れるようになった。この見方が正しいければ、メルクリウスやマルスが単一の神ではなく、多数の土着の神々であることになる。そして、これら配偶神として現れる女神は土着の豊饒を表す地母神であることから、その土地の地母神と部族の主神としてのメルクリウスやマルスの結びつきは、その部族による土地の支配権を象徴していると考えられる。恐らく、ローマの影響によって部族が男神、土地が女神として表現されるようになったため、それまで漠然と認識されていた部族によるその土地の支配権が、神とその配偶神という形で具現化されたものであろう。

本章では、ケルトのメルクリウスやマルスは、土着の信仰がローマの影響により、「メルクリウス」や「マルス」といった名のもとに収斂されて崇拝されていたものであり、多様なエピソードにローマ以前の信仰の名残が留められていることを見てきた。次にこの見解が、ラテン語の名称を持つケルトの神々について一般化出来るのかどうか、他の例についても検討してみたい。

メルクリウスやマルスと並んで研究者の興味を惹いてきたのがマトロナエと呼ばれる女神である。従来の研究から、マトロナエには一〇〇種類以上のエピソードが知られており、それらは意味内容から、概ね四種類に分類されている。即ち、①土地の守護、②水源名、③部族名、④神性を示すものである。^{⑤④} 神性を示すものには、*alliae*「強きもの」、*alagabiae*

「全てを与えるもの」^{⑤⑥} arvagastae 「惜しみなくもてなすもの」^{⑤⑦} campestres 「陣営の神」^{⑤⑧} dervones (dervonnae) 「柏の精」^{⑤⑨} gabiae 「与えるもの」^{⑤⑩} などがある。マトロナエについて、ケルトとゲルマン、ローマとのシンクレティズムという観点から論じた相京氏は、マトロナエの神性の起源、神像の図像学的解釈、他神性との融合、という三点についての考察に基づき、マトロナエの本質は農民活動の守護・豊饒神であり、ケルトのマトロナエ信仰は古代世界に一般的な母神信仰の一つに過ぎなかったと結論付けた^{⑤⑪}。マトロナエの本質的な神性が、相京氏のいうように豊饒と多産であることは、図像表現からも裏付けられる。図像表現では、マトロナエは手に収穫物や、豊饒の角などを持った姿で表されることが多い。また、マトロナエの図像は、しばしば三人の女性の姿で表されるが、これはギリシアからの影響と思われる^{⑤⑫}。

マトロナエのエピセットのうち、最も多いものは土地の守護を表すものである。ラテン碑文に現れるエピセットには、Matronis Axsinginehis^{⑤⑬} Matronis Albiahenabus^{⑤⑭} などがあり、その他にも Ahinehae^{⑤⑮} Almayaheneae^{⑤⑯} など为例として挙げられる。その他、ギリシア文字ガリア語の碑文では、*matrebo ylaveuaxbo*^{⑤⑰} *matrebo vejauuaxaxbo*^{⑤⑱} などが例として挙げられる。マトロナエの奉獻碑文の数及びエピセットの種類は現在知られている神々の中で最も多い。このようなマトロナエのエピセットの多様性は、やはりマトロナエが単一の神性ではなく、豊饒と多産を示す地母神的神性が「マトロナエ」という名のもとで信仰されていたと考えるのが妥当であり、この見解は上述の相京氏の結論とも矛盾しない。

筆者の見解を補強するために、もう一例、アポロンを例にとって検討を加えたい。カエサル^{⑥⑰}の記述では、アポロンがメルクリウスの次に述べられている^{⑥⑱}。アポロンは一五〇以上の碑文に現れ、一五以上のエピセットを持っている。神性を示すものには *amarcolias* 「先見の明のある」^{⑥⑲} のように予言に関するもの、*belenos* 「輝かしいもの」^{⑥⑳}、*太陽*^㉑ *陽*^㉒ *livicus* 「輝かし」^㉓ などのように太陽神であることを示すもの、*borvo* (*borro*) 「温泉 (治癒能力を表していると思われ^㉔)」^㉕ *cobledulitavus* 「治癒力のある」^㉖ *virtutis* 「人間の保護者、人間の救済者」^㉗ などのように治癒に関するもの、*anexiomarus* 「大なる守護者」^㉘ *atepomarus* 「偉大な騎兵」^㉙ *mogo* 「偉大な」^㉚ *mogunnus* 「力強い」^㉛ *moritasgus*

「海の王」^{②①}、などのように至上者、守護者を示すもの、maponus「若者」^{②②}などがある。治療に関してはカエサルも述べており、その他の機能も、ギリシア・ローマのアポロンの機能に見られるものである。更に、siannus (siannus)「温泉の守護神」^{②③}fontiorix「部族の王」^{②④}vindonus「泉の守護神」^{②⑤}などは、部族・地域の主神・守護神と考えられる。

これらのエピソードから知られるアポロンの神性を、古典文献による記述と比較してみよう。一三八年、最初の軍人皇帝マクシミアヌス帝が北イタリアのアクイレイアを包囲した時のこととして、『ヒストリア・アウグスタ』は以下のような話を伝えている。

マクシミアヌスはアクイレイアを包囲したが、無駄だったので、使節をその都市へ送った。メノピルスが同僚と共に、神ベレノスも占い師を通じて、マクシミアヌスは打ち負かされるだろうと述べた、といって反対しなかったなら、人々は殆どその使節と協定を結ぶところであった。^{②⑥}

ヘロディアヌスはこの件について次のように記述している。

土着の神が勝利を約束したという神託も広まった。彼ら（アクイレイアの人々）はベレス（ベレノス）^{②⑦}と呼んでいる神を、特に崇拜しているが、その神はアポロンを意味している。マクシミアヌスの兵士の一部は、しばしばその神の姿が宙に現れ、その都市のために戦ったといっている。^{②⑧}

ここでは、ベレノスは神託を下す神であり、アクイレイアの守護神ともなっている。

また、三世紀ローマの歴史家ディオ・カッシウスは、カラカラ帝が病氣になった時（二一三年）のこととして、次のように述べている。

アポロン・グランヌスもアスクレピオスもセラピスも、彼（カラカラ帝）の度重なる嘆願や、多大な忍耐にもかかわらず、助けることはなかった。^{②⑨}

ここでは、グランヌスは「治療」と密接に結びつけられている。ベレノスもグランヌスも共に「太陽」という意味であり、

これらの記述から窺われるアポロンの神性は、エピセツトから知られるアポロンの神性と一致していることが分かる。

以上のことから判断すると、アポロンに関しては、先に考察したメルクリウスやマルス、マトロナエとは異なり、ギリシア・ローマ神話の神を、ケルト人がそのまま受け入れている、若しくは、アポロンに相当する神がケルト人の間に存在し、その神をアポロンと同一視しているように見える。アポロンはエピセツトの種類がメルクリウスやマルスよりも少ないが、これは部族・地域の主神・守護神を示すエピセツトが少ないためである。部族・地域の主神・守護神を示すものは、殆どが泉の守護神である。これは前章で述べた水源信仰との関連を窺わせる。実際、アポロンの奉獻碑文は、泉から多く出土しており、水源信仰と治癒効果との関連を入れるなら、寧ろ、ケルトの水源信仰が、メルクリウスなどのように、治癒効果のためにアポロンという名に収斂されて信仰され、その過程で、ギリシア・ローマ的なアポロンの機能が付け加えられていったものと推測することが出来る。

- ① *interpretatio Romana* と呼ばれる現象で、土着の神々などをローンの名称で呼ぶことをいう。この言葉は Tacitus, *Germania*, 43. に出づる言葉である。逆に、土着の側からの視点に立つ場合 *interpretatio Gallica* などと呼ばれる場合もある。
- ② ラテン語風にアポロと表記すべきかも知れないが、我が国ではアポロンのほうが人口に膾炙していると思われ、また他の神とは違い、ギリシア語起源であるのは明らかなので、本稿ではギリシア風にアポロンと表記することにする。
- ③ Caesar, *B. G.*, 6, 17. 括弧内は筆者による補ふ。
- ④ アポロンについては後述。ユピテルなどについては、別稿を準備中であるので、本稿では割愛する。なお、ユピテルについての研究として Green, M., "The Worship of the Romano-Celtic Wheel-God in Britain seen in Relation to Gaulish Evidence", *Latomus* 38-2, 1979, pp. 345-367. Id. *The Wheel as a Cult-Symbol in the Romano-Celtic World*, Bruxelles, 1984. がある。
- ⑤ 以下で述べるメルクリウスやマトロナエに関する研究を参照。
- ⑥ *Corpus Inscriptionum Latinarum* (以下 CIL と略) 12, 2199.
- ⑦ CIL 13, 5676.
- ⑧ 鶴岡真弓『ケルト美術』ちくま学芸文庫、二〇〇一、一一九頁。
- ⑨ CIL 3, 5773.
- ⑩ CIL 13, 3659, 4500, 5373, 5773, 6085, 6119, 6345, 7359, 8237, 11476, 11607.
- ⑪ CIL 13, 6122.
- ⑫ CIL 13, 576.
- ⑬ CIL 13, 577, 3660, 4257, 4478, 5991, 6118, 6347, 6384, 6404.
- ⑭ CIL 13, 1522, 6603, 7845, 8164, 8235, 8579, 8580, 8709.

- ²⁹ CIL 12. 2373.
³⁰ CIL 13. 1523.
³¹ CIL 12. 1060, 1300.
³² CIL 7. 925.
³³ CIL 13. 2887, 5479, 5597, 5598, 5599, 5600, 5601, 5602, 5603.
³⁴ $\epsilon\lambda\lambda\upsilon^{\circ}$
³⁵ CIL 13. 2532.
³⁶ CIL 13. 95, 96, 97, 98, 100, 101, 102, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 118.
³⁷ CIL 7. 61., CIL 13. 1190.
³⁸ CIL 6. 46., CIL 13. 3980, 8671, 8701, 11818, *Inscriptions Latines des Trois Gaules* (ΣΙΓ-ΙΛΤΓ-ΛΨΣΓ) 351.
³⁹ CIL 12. 356.
⁴⁰ CIL 13. 5035, 5046, 5054, 6474, 11473.
⁴¹ CIL 5. 7868., CIL 13. 1675, 2532, 2846, 5340.
⁴² CIL 13. 3150.
⁴³ CIL 7. 36., CIL 13. 3087, 6221, 7241, 7242, 7249, 7252, 7412, 7608, 11605.
⁴⁴ CIL 5. 7862, 7862a.
⁴⁵ CIL 13. 1349, 3096, 3101, 3102, 3148, ILTG 343, 344, 345.
⁴⁶ CIL 7. 137, 138, 139, 140.
⁴⁷ CIL 12. 1169, 1170, 1171.
⁴⁸ CIL 12. 3.
⁴⁹ CIL 13. 422, 423, 424.
⁵⁰ CIL 13. 3654, 3970, 4030, 4122, 4137, 7661, $\epsilon\lambda\lambda\upsilon^{\circ}$
⁵¹ CIL 13. 1514.

- ③⑦ CIL 13. 4256^a 「ハヌス」 CIL 13. 10024. 意味は「死者を愛する者」である。
 ③⑧ CIL 6. 31182, CIL 7. 79, 84.
 ③⑨ メルクリヌス^a CIL 13. 577, 3660, 4257, 4478, 5991, 6118, 6347, 6384, 6404^a 「ハヌス」 CIL 12. 2373.
 ④ テキストでは Hesus Mars となっているが、Hesus はエヌスと同じものと解して良いと思われる。
 ④⑩ この箇所、原文が不明瞭であり、文意が通じない。生け贄の血を流させるために「マルスが生け贄の四肢を切り離すの意か」。
 ④⑪ Usener, H. (ed.), *M. Annaei Lucani Commenta Berenstia*, Lipsiae, 1869 (rep. Hildesheim, 1967), ad l. 445^a. テウタテスなどに關しつゝ
 ④⑫ Duval, P.-M., "Teutates, Esus, Taranis", *Travaux sur la Gaul*, vol. 1, Rome, 1989, pp. 275-287. を参照。
 ④⑬ Julian, C., *Histoire de la Gaul Breve*, Paris, 1920-26 (rep. 2 vols, 1993) II, pp. 142-144. (オブリジナルでは VI, chap. 1. 6) 以下「シムリアンからの引用は一九九三年の再版のページ数のみを示す」。
 ④⑭ Sjoestedt, M.-L., *Gods and Heroes of the Celts*, tr. by M. Dillon, London, 1949, pp. 14-23. Thevenot, E., "Mars et Mercure en Gaule", *Latomus* 20, 1961, pp. 535-540.
 ④⑮ ルーは Lugh と綴られることが多い。アイルランドの神話・伝説は七世紀から九世紀頃成立したといわれるが、現存する写本は九世紀以降のものが殆どである。九世紀頃までは古アイルランド語 (Old Irish) が用いられていたが、この頃から中期アイルランド語 (Middle Irish) が用いられ始めるため、写本の表記はこの両者の間で揺れている。そのため、これをどのようにカナ表記するかは難しい問題で、ルグ、ルーグなどと表記されることもあるが、本稿ではルー

に統一する。ルーは、アイルランドの神話ではあらゆる技芸に秀でた万能の神として登場する。

- ④ H. d'Arbois de Jubainville, *Le cycle mythologique irlandais et la mythologie celtique*, Paris, 1884. 筆者未読。Maier, B., "Is Lug to be identified with Mercury (Bell. Gall. VI 17, 1) ? New Suggestions on an Old Problem", *Ériu* 47, 1996, p. 127. 249°
- ⑤ Vies, J. de, *La Religion des Celtes*, tr. by L. Jospin, Paris, 1963, pp. 48-63. Duval, P.-M., *Les Dieux de la Gaule*, Paris, 1976, pp. 69-71. P. ベンカーナ『ケルト神話』松田幸雄訳、青土社、一九九一、四二五―五二頁。
- ⑥ Maier, B., *op. cit.*
- ⑦ ロクメルトは同じく Bémont, C., "Rosmerta", *EC* 9-1, 1960, pp. 29-43. を参照。
- ⑧ キリシマ神話のヘルメスの母神マイアとは別の女神である。ロクメルト・マイアはレリーフでは区別が困難である。
- ⑨ ウヘヌスを伴うのは Espérandieu, E., *op. cit.* vol. 2, 1908, No. 1593. 433。『ロクメルトを伴うのは』同 vol. 8, 1922, No. 5979. 433。
- ⑩ マイアナを伴うのは同 vol. 8, 1922, No. 5971. 433。『ロクメルトを伴うのは』同 vol. 6, 1915, No. 4671. 433。
- ⑪ セウスに同時に複数の配偶神が存在していることを認めることはできない。
- ⑫ ペトロナエに関しては以下の文献を参照。Heichelheim, F. M., "Mares", in Pauly and Wissowa (eds.) *Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart/München (以下 RE 略) 14, 1930, coll. 2213-2241. Ruger, C. B., "A Husband for the Mother Goddesses - Some Observations on the *Matronae Aufaniae*", in B. Hartley and J. Wachter (eds.), *Rome and her Northern Provinces*, Gloucester, 1983, pp. 210-221. Bauchenss, G., and Neumann, G. (eds.), *Matronen und verwandte Gottheiten*, Köln, 1987. 所収の諸論文、相京邦宏「ケルト・ゲルマンの神性 Matronae——ネリハント世界周辺の神性研究のための一試論」『オリエント』三十七・一、一九九四、同「ケルト人の Matronae 信仰」『歴史人類』一九、一九九二、〇八―一七八頁、同「ケルト・ヨーロッパの文化の融合と其の限界——ケルト神文の分析を中心に——」『社会文化史学』三二、一九九一。
- ⑬ Julian, C., *op. cit.* II, p. 635. Neumann, G., "Die germanischen Matronen-Beinamen", in Bauchenss, G., and Neumann, G. (eds.), *op. cit.*, pp. 103-132. を参照。両者の表現は若干異なるが、指している内容は大きな差はないと思われる。
- ⑭ CIL 13, 8157, 8211. 以下、ペトロナエのヘロサントの訳語は相京氏に従った。
- ⑮ CIL 13, 7855.
- ⑯ CIL 3, 3667, 7904, CIL 6, 768, 31139, 31144, 31157, 31158, 31167, CIL 7, 510, 1029, 1080, 1114, 1129, CIL 13, 3585, 3667, 6449, 6470, 7880.
- ⑰ CIL 5, 5791.
- ⑱ CIL 13, 7856.
- ⑲ 相京邦宏「ケルト人の Matronae 信仰」『歴史人類』一九、一九九二、一〇八―一七八頁。
- ⑳ 本稿第二章を参照。相京氏はペトロナエの像とキューベレ神との類似を指摘する。相京邦宏、前掲論文、一九七頁。

- ② CIL 13. 8216.
 ③ CIL 13. 6387, 7933, 7934, 7935, 7936.
 ④ CIL 13. 8845.
 ⑤ CIL 13. 12065.
 ⑥ Lejeune, M. et al. (eds.), *Recueil des Inscriptions Gauloises*, Paris (ズレ RIG ヌ書) G64.
 ⑦ RIG G203.
 ⑧ 管見の限るにせよ、トホロンニツツの研究に Le Roux, F., "Introduction à une étude de l'Apollon gaulois", *Ogam* 11, 1959, pp. 216-226. に始まる。にせよ。
 ⑨ CIL 13. 2600.
 ⑩ CIL 5. 1829, 1866, 2143, 2144, 2145, 2146, CIL 6. 2800, CIL 11. 353, CIL 12. 5693, 5958, CIL 13. 113, RIG G24, G28, G63. にせよ。
 ⑪ CIL 13. 2600, 3635, 5315, 5861, 5870, 5871, 5873, 5874, 5876, 5881, 5942, 6462, 7975, 8007, 8712, 10972, ILTG 416. にせよ。
 ⑫ CIL 13. 8006.
 ⑬ CIL 13. 2443, 2444, 2805, 2806, 2607, 2808, 2901, 5911-5920.
 ⑭ CIL 13. 939.
 ⑮ CIL 12. 2525, CIL 13. 2010, 3185.
 ⑯ CIL 13. 3190.
 ⑰ CIL 3. 4580, CIL 12. 1148, 5216, CIL 13. 1318, 2066a, 3067.
 ⑱ CIL 13. 5315.
 ⑲ CIL 13. 11240, 11241.
 ⑳ CIL 13. 5924. にせよ。
 ㉑ CIL 13. 1536, 1669.
 ㉒ CIL 13. 7564.
 ㉓ CIL 13. 5644, 5645.
 ㉔ 一三八年、マウリウスはドナウ地方からイタリアへ向かって進軍、途中アウレリアを包囲中、自軍の兵士に殺害された。なお、この一三八年の出来事に関しては、南川高志『ローマ皇帝とその時代』創文社、一九九五、三一九―三五〇頁を参照。
 ㉕ SHA, *Maximianus*, 22. 1.
 ㉖ 原文 Bêlev (主格 Bêleg) は、ベレンスと同義と考えて良いと思われる。
 ㉗ Herodianos, 8. 3. 8, 阪本浩「帝政期の北イタリアにおける宗教生活」『青山学院大学総合研究所人文系研究センター研究叢書第一〇号 東西の言語・文化の比較研究』一九九八、二五頁以下に同じ部分が出ているが、筆者とは若干解釈が異なる。
 ㉘ Dio Cassius, 78. 15. 6, テキストは Loeb Classical Library 所収のものを用いた。

第四章 ケルトの信仰の変容——ケルト語の名称を持つ神々

第三章冒頭の課題の二番目として、名称がケルト語に由来する神々の中から、ここでは女神エポナを取り上げる。エポ

ナに関しては、西ヨーロッパから約六〇の奉獻碑文と二五〇の圖像表現^①が知られており、幾つかの古典史料にその名が現れるが、その他の神々については、古典史料に殆ど記述がなく、多くは碑文に一度出てくるだけであり、詳細は不明だからである。

従来の研究^②では、この女神の名は *Epu (*gen.* *Eponos) 「馬」というケルト語より派生したものであり、その神性は馬の守護神と考えられている。その根拠は、以下のような古典史料である。例えば、プルタルコスは次のように述べている。

フルウィウス・ステッルスは女性を嫌い、馬と交わつた。やがてそれは美しい少女を生み、彼らはエポナと名付けた。彼女は馬に關して配慮する女神である。アゲシラオスは『イタリア史』の三巻でそのように述べている。^③

また、ユウエナリスやアプレイウス^④からは、エポナが、厩などに像を飾られ信仰されていたことが窺われる。この点に關して、圖像では乗馬姿か、馬の間で玉座に座った姿で表され、しばしば手に収穫物や豊饒の角を持っている。エポナの神性としては、圖像で収穫物や豊饒の角を持つことから、豊饒の女神という側面や、地下世界との關連が指摘されており、フォーシーは異界の扉を開ける鍵を持つエポナや、エポナが死者を導いているレリーフが存在することから、エポナには異界へ出発する魂を案内する女神という面も存在することを指摘する^⑤。しかし、それらはあくまでもエポナの有する一つの側面であり、その神性の中心が馬の守護神であることに疑義を差し挟む研究者はいない。

エポナの信仰されていた範圍に關しては、エポナの祭礼が二月一八日に営まれたことが碑文から知られているが、これはケルトの神々の祭礼がローマの曆に組み込まれた唯一の例であり、エポナ信仰はケルト人に限らず、広い範圍に普及していたことが見て取れる。リンダフはエポナの奉獻碑文はローマ軍の駐屯地から多数出土していることから、兵士、特に補助軍の騎兵が自分の馬の保護を求めて信仰していたものと見なしており、この見解は諸家の間で認められている^⑥。

本稿では先ず、エポナの圖像表現の起源から具体的に検討してみたい。エポナは乗馬姿か馬の間で玉座に座った姿で表される。管見の限り、従来の研究では、これら二種の圖像の有する意味の相違などに注意が払われることはあっても、そ

の起源に関する分析は行われていない。

プリニウスは、ローマにおける女性騎馬像の起源について、次のように述べている。

人の像は、信頼出来る記録において、明らかに長い間存在してきた。そして、騎馬像の起源も甚だ古い。クロエリアの騎馬像によつて、女性にもこの名誉が加えられた。あたかも、彼女がトガを纏っているだけでは不十分であるかのようなのである。ルクレティアや、王達を追放したブルートゥスにも像は与えられなかった。クロエリアは彼が追放したその王達のために人質となったのである。（中略）それに対して、アンニウス・フェティアリスは以下のようにいう。スぺルプスの宮殿の入り口の庭（vestibulum）にある、ユピテル・スタトルの神殿の向かい側の騎馬像は、執政官であつたプブリコラの娘、ウアレリアの像であり、彼女だけが逃げ、ティベリス川を泳いで渡り、残りの人質は、ボルセンナのところへ送られ、タルクィニウスの策略によつて連れ去られた。^⑩リウイウスにも同様の記述がある。

平和が回復すると、ローマ人は、女性（クロエリア）の前代未聞の勇氣に対して、未経験の種類の名誉、即ち騎馬像を与えた。聖なる道の頂上に、馬に乗った乙女が置かれた。^⑪

これらは紀元前六世紀の出来事とされている。事実であるかどうか確かめる術はないが、記事を残したプリニウスは七九年八月に没したのであるから、この記述はそれ以前になされたものである。その当時、既に女性騎馬像のモデルについて二つの説が紹介されており、どちらが正しいか分からなくなつていたところから、少なくとも、プリニウスの数世代前にはローマにおいて女性騎馬像が存在していたと考えて差し支えないであろう。現存するエポナの画像の殆どは紀元前後以降のものであるため、ケルトとローマとの交流を考慮すると、既にローマで存在していた女性の騎馬像が持ち込まれ、エポナの画像表現に影響を与え、エポナも乗馬姿で表されたものと考えられる。第二章で述べたように、ケルトの画像表現の形成には、地中海からの影響が看取され、エポナにはこのような状況証拠しかないが、外部からの影響を否定する理由はない。

エポナの図像表現には、もう一つ、馬の間で玉座に座った姿で表されるものがある^⑩。ギリシアにも、豊饒の女神が動物の主人として、獅子に挟まれている図像が存在しており、オリエントの豊饒の女神像や小アジアのキュベレ像などにも、同様の図像表現が見受けられる。これらとエポナとの間の類似は明瞭であり、ケルト人と周辺世界との交流を鑑みるならば、オリエントの図像表現が、直接ケルト人に影響を与えたというより、寧ろ、ギリシアを経由して伝わったと推定する方が自然であろう。第二章で述べたが、ケルト人には特定の動物を神聖なものと見なす、動物崇拜が存在した。それらの動物は、神聖なもの、或いは神そのものと考えられ、場合によっては神の変身した姿、神の使いとして崇拜されていた。エポナは、そのような動物崇拜が変容し、具体的な女神として信仰されるようになったものと思われる。ガリアでは、馬を象ったコインが多数出土しているが、これは、後に擬人化された「エポナ」へと結晶されていく、前段階の動物崇拜を示している。他の動物ではなく、馬の守護神であるエポナの信仰が特に広まったのは、ケルト社会において馬が特別な地位にあったことによる。例えば、ベケニに従えば、馬はケルト人の家畜の中で唯一食用とされなかった動物であると考え^⑪て良い。馬は軍事的にも重要な意味を持っていたからである。

以上の考察から、エポナ信仰は、ローマ征服以前に存在していた信仰が、地中海世界の図像表現を取り入れることにより、明確な形で表現されるようになったものであると考えられる。更に、エポナの神性に関して、諸史料が一致していることから、前章で検討したラテン語の名称を持つ神々とは異なり、このエポナは、ローマ以前に信仰されていた類似の神性と対応しているものと見なすことが出来るよう。

エポナ信仰を以てケルト語の名称を持つ他の神々への信仰を推測することが許されるなら、こうした神々は、ケルトの動物崇拜が、地中海世界との接触により人格化された神となったものである。動物崇拜の段階では、神は動物の姿でイメージされていたが、それが半神半獣の姿で表されるようになり、その後、擬人化されたのである。エポナの像は既に擬人化された姿を表しているが、半神半獣の段階を示しているものとして、一般的にケルトの神ケルヌノスと解釈されて

結論と展望

本稿では、ローマ支配下のガリアにおけるケルトの信仰について、ケルトの神々を、ラテン語の名称を持つ神々とケルト語の名称を持つ神々との二つに分類して考察した。その結果、ラテン語の名称を持つ神々は、ケルトの部族神や地母神、水源信仰などが、メルクリウスやマルスなど、特定の名称のもとに収斂されて信仰されたものであり、ケルト語の名称を持つ神々は、ケルトの動物崇拜がローマの影響により神として具現化したものであることが明らかとなった。即ち、何れのグループにおいても、ケルトの信仰は、地中海世界との接触により変容した面はあるが、ローマ支配下においても、なおケルトの要素を色濃く残していたことが看取されたのである。

ところで、第三章において考察を加えた奉獻碑文は、ラテン語で刻まれ、碑文の最初には IOM (Iovi optimo maximo 「最高神ユピテルへ」)、碑文の終わりには vslm (votum solvit libens merito/votum solverent libentes merito 「御利益から喜んで奉獻した」)などの定型句がしばしば現れるが、奉獻の対象となっている神は、Mercurius Arvernorum や Mars camulus などであり、祈願する神はケルト風に解釈されており、神々のエピソードの多くはケルト語起源のものである。従って、ラテン碑文からもケルトの要素の存続が裏付けられ、ケルトの伝統に基づいているということが出来る。同じことは、ガリア語の碑文についても当てはまる。

ここでは、第二章でも触れたシャマリエル出土のガリア語碑文を取り上げる。これは一九七一年、フランス中部シャマリエル近郊、ロシユの泉で発見された鉛板で、一世紀から二世紀のものと推定されている。縦約五八ミリメートル、横約三九ミリメートル、厚さ約一ミリメートルの鉛板に一二行にわたって、草書体のラテン文字三三六文字が記されている。なお、文字は表にのみ記されている。先ず、碑文の試訳を掲げる。^①

私は冥界の力ある神 *Maponos Arvernatis* に祈願する。次の者達の呪文によって私達は求める。告発者である *C. Lucius Floros Nigrinus* ^⑤, *Aemilius Paterin (os)*, *Claudios Legitimos*, *Caelios Pelign (os)*, *Claudios Pelign (os)*, *Marcios Victorin (os)*, *Addedillos* の子 *Asiatic (os)*, そして *Secovii* ^⑥ が誓う。もしそれが小さかったならば、大きくなるだろう。私は盲目のものを見るだろう。来るべき時に、私はこの碑文の歌によってそうなるのを見るだろう。誓いによって私は（歪められているものを）正す。誓いによって私は正す。誓いによって私は正す。誓いによって。

この碑文は所謂呪詛の碑文（curse tablet）に分類されている。このような呪詛は、ラテン語では一般に *defixio* と表現されており、古代世界に広く見られる現象である。ギリシア・ローマの慣習では、土器、大理石、蠟などに記されたものも少数ながら存在するが、現存する呪詛の碑文の多くは鉛或いは鉛の合金に刻まれている。シャマリエールの碑文は、マボノスに呼びかけているが、これはアポロンのエビセツトとして現れる神である。ギリシアでは、呪詛の際呼びかける神としては、ヘルメスが最も一般的であり、ヘカテ、コレ、ペルセポネ、ハデスなどが続く。ラテン碑文の場合、マネス、ユピテル、プルト、ネメシス、メルクリウスなどが一般的であり、エジプトでは、ヘルメスと同一視されているトトが最も一般的であり、セト、オシリスがそれに続く。アポロンが出てくるのは稀である。地中海世界の慣習では、本来、ここで呼びかけるべきは、アポロンと同一視された神ではないのである。この碑文がこのようにローマの伝統に従わず、また、本来ガリア語で記されているところから判断して、碑文を作製した者が、ケルト風であることを基調として選択したと推定することが出来る。

この呪詛の碑文を作製した者は、明らかにローマの碑文についても知識を持っていた。それは、呪詛が鉛板に刻まれているなど、材質などの点ではローマの様式を取り入れていたことや、碑文の形式から見て取れる。碑文の作成者はローマの風習を知っており、従ってローマからケルトへの影響は明白である。しかし、このようにローマの風習に従っている面はあるものの、先に見たように、基調はケルトの伝統に従っていると解することが出来る。しかも、ローマの文化をその

まま受け入れるのではなく、先ず、ケルトの伝統の中に取り込み、一旦消化した上で受け入れることが看取されるのである。ここからは、ケルトとローマの融合、即ち「ガロ・ローマ」と呼ぶにふさわしい現象を読み取ることが出来るのではないだろうか。ところで、この結論を踏まえて、更に筆者は更に次のような展望を示したい。

ケルト社会には、インド・ヨーロッパ的なアルカイックな要素が比較的よく残っていたといわれる。比較言語学の大家バンヴェニストによれば、インド・ヨーロッパの王権概念は政治的というよりも寧ろ宗教的なものであり、その役割は権力を行使することではなく、規則を定め、何が「正しい」ことなのかを定めることであつた。その権威は王が保持していた宗教性によつて保たれていた。^⑬当初、ケルトの王はまさにこのような存在として立ち現れる。^⑭しかし、ケルト人の拡大と共に、王は専ら軍事を司るようになり、宗教はドルイドの手に移つたと思われる。^⑮それと共に宗教的権威もドルイドの手に移つたが、紀元前二世紀の終わり頃から、ドルイドによる宗教の独占がほころび始めた。王またはドルイドが神々との仲介役を果たしていた間は、彼らには宗教的権威が備わっており、それを以て特権的地位を占めることが出来た。しかし、人々が直接神々へ祈願するようになり、神々との仲介役を必要としなくなると、ドルイドが保持していた宗教的権威も失われ、その重要性も低下していったと考えられる。チャドウィックによれば、カエサルがガリア征服以前、紀元前二世紀終わり―紀元前一世紀初め頃、ガリアでは既にドルイドの影響力は衰え始めており、祭司よりも寧ろ、哲学者や詩人に近い存在であつたとされ、彼女のこのような見解は現在でも概ね受け入れられている。^⑯同じ時期、集会が重要な役割を果たすようになっており、王よりも寧ろ貴族層が力を持つており、また一般の部族民の力が増大してきたことが窺われる。^⑰

それでは、一般の人々が直接神へ祈願や奉獻を行うようになったのはいつ頃のことであろうか。カエサルの記述には、「彼ら(ドルイド)は、神々に関することに参加し、公私の犠牲を行い、宗教を説明する。」^⑱とあり、神々への生け贄や奉獻はドルイドを通して行うことになっている。このカエサルの記述が、彼自身の見聞によるのか、ポセイドニオスを利用しているのか、議論がある。一方、現存する奉獻碑文のうち、確実に年代決定し得る最古のものは、ティベリウス帝期の

マトロナエへの奉獻碑文である。従って、一世紀には一般の人々が直接神々へ祈願するようになっていたと考えられる。

ローマが宗教に対して寛容であったことはよく知られている。その例外が、ドルイディズムとキリスト教であるが、ケルトの神々への信仰は禁止されず、ローマの神々を信仰するよう強制されることもなかった。征服後、既にケルト社会において地位の低下しつつあったドルイドは弾圧もあり、姿を消した。しかし、ガリアは、表面上「ローマ化」したように見えながらも、信仰が、個々人の手で保持されたことによって、ケルトの伝統が存続し続け、ローマの要素と融合し、最終的にガロ＝ローマと呼ばれる文化を生み出したといえるのである。

最後に、序論において「ケルト」を巡る近年の議論を紹介したが、このような議論は、定義や概念を巡る理論的考察によつてではなく、本稿によつて示されたように、例えばガロ＝ローマ文化の形成というような、文化や社会の実態に関する、内在的議論によつてこそ乗り越えることが出来るのではないであらうか。そして、結局そのような方法によつてのみ「ケルト」の実態に近付くことが出来るのではないであらうか。

- ① テキストは RIG L100. を用いた。その他 訳出に類たつては、以下の文献を参考にした。Lejeune, M., & Marichal, R., "Textes gaulois et gallo-romains en cursive Latine", *EC* 15-1, 1977, pp. 151-168. Fleuriot, L., "Le Vocabulaire de l'Inscription gauloise de Chamalières", *EC* 15-1, 1977, pp. 173-190. Id. "La Tablette de Chamalières. Nouveaux Commentaires", *EC* 17, 1980, pp. 145-159. Henry, P. L., "Interpreting the Gaulish Inscription of Chamalières", *EC* 21, 1984, pp. 141-150. Lambert, P.-Y., "La Tablette gauloise de Chamalières", *EC* 16, 1979, pp. 141-169. Id. "A Restatement on the Gaulish Tablet from Chamalières", *The Bulletin of the Board of Celtic Studies* (ガール・BCS 年報) 34, 1987, pp. 10-17. Schmidt, K. H., "The Gaulish Inscription of Chamalières", *BCS* 29, 1982,

- pp. 256-268. Billy, P.-H., *Thesaurus Linguae Gallicae*, Hildesheim, 1993. Delamarre, X., *Dictionnaire de la langue gauloise*, Paris, 2001. Vendryes, J. et al., *Lexique étymologique de l'irlandais ancien*, Paris, 1959.

- ② 「次の者達の呪文」と訳したのは *brixia anderon* である。 *brixia* は古アイルランド語 *brícht* 「呪文・魔術」と同じ語根である。 *anderon* という語には幾つかの解釈がある。一つはサンスクリット *adhara* 「低い」と同語根であるとする解釈であり、もう一つの解釈は、古アイルランド語 *ainder* 「少女」と関連付ける。一九八三年、アヴェエロンのオスビタル・ドゥ・ラルザックで発見された草書体ラテン文字ガリア語の鉛板にも *andernados brictom* という語句がある。シャペリエールでもラルザックでも、これらの語句は人名列挙の直前に置かれ

ており、呪詛の碑文における表現形式上の二つの特色と見なすことが出来る。ところで、ラルザックの碑文は女性の呪詛に対する対抗呪文と解釈されており、*andernados bricrom* は女性の呪文とは解釈し難い。そうすると、シャマリエールの碑文も同様に、サンスクリット *adhara* 「低い」と同語根であると解釈できるであろう。

③ テキスト *lopiies snieddic* は解釈が困難である。

④ ここで「告発者」と訳した単語は、*adgation* であるが、この語は古アイルランド語の *ad-gair* 「告発する、非難する」と関連付けられて解釈されている。この語の具体的な意味は詳らかにし得ない。

⑤ 以下の人名はこの碑文の奉獻者とする解釈と、反対にこの碑文の呪詛の対象とされている者達とする解釈とがある。

⑥ テキスト *secon* は解釈困難、取り敢えずここでは人名と解した。

⑦ 文意不明瞭。呪詛の対象が盲目となるのを見る、という意味か？或いは盲目の私であろうか？

⑧ この一文は解釈困難。

⑨ Gager, J. G., *Curse Tablets and Binding Spells from the Ancient World*, Oxford, 1992, pp. 3-4.

⑩ 本稿第四章を参照。

⑪ Gager, J. G., *op. cit.*, pp. 12-13.

⑫ Woolf, G., *Becoming Roman*, Cambridge, 1998, pp. 82-105.

⑬ バンヴェニスト『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』Ⅱ、前田耕作監修、言叢社、一九八七、五〇九頁。

⑭ Livius, 5, 34.

⑮ ポリュビオスでは、ケルト人の王は軍事指導者として現れる。
Polybios, 2, 14-35.

⑯ Chadwick, N. K., *The Druids 2nd ed.*, Cardiff, 1997.

⑰ 集会の重要性は Livius, 21, 31. などからも窺われる。

⑱ Caesar, B. G., 6, 13.

⑲ Caesar, B. G., 6, 16. にもドルイドが犠牲を行う記述がある。

⑳ ティエルニーはポセイドニオスに拠っているとするが、ナッシュはカエサル独自性を強調する。Tierney, J. J., "The Celtic Ethnography of Posidonius", *PRJA* 60, 1960, pp. 189-276. Nash, D., "Reconstructing Poseidonios' Celtic Ethnography: Some Considerations", *Britannia* 7, 1976, pp. 111-126.

㉑ CIL 5, 7210⁴ 相京邦宏、前掲論文、一八六頁。

Accepting House and a Central Reserve Bank following the currency reform emerged out of this logic.

La tradition celtique en Gaule:
la formation de la culture gallo-romaine

par

HIKIDA Takayasu

Cet article réfléchit sur les caractéristiques de la société celtique en Gaule, en prêtant attention à la relation entre la religion et la société. En général, on dit que la romanisation de la Gaule s'accomplit vers le premier siècle de notre ère. Mais quelques divinités indigènes étaient adorées en Gaule romaine.

Dans la religion celtique, le culte des divinités était un élément essentiel. Il y avait deux groupes de divinités celtiques: l'un avait les noms latins, par exemple, *Mercurius*, *Mars*, *Apollo*, *Matronae*, etc., l'autre les noms celtiques, par exemple, *Epona*, *Cernunnos*, etc. Premièrement, selon César, les Gaulois adoraient *Mercurius*, *Mars*, *Apollo*, etc. Pour prendre *Mercurius* pour exemple, on trouve une quarantaine d'épithètes de *Mercurius*, mais la plupart tirent leur origine de noms de lieu, par exemple, *Mercurius Arvernorum*, *Mercurius Magniacus vellaunus*, etc. Dans étude d'épithètes, j'ai montré que les divinités de noms latins n'avaient pas de correspondance avec les divinités celtiques, mais les divinités tutélaires des tribus étaient adorées en tant que '*Mercurius*'. Je suis arrivé à la même conclusion concernant *Mars*, *Apollo* et *Matronae*. Deuxièmement, la déesse *Epona* est une divinité typique. L'analyse de la déesse *Epona* admettait que le culte des dieux zoomorphes était transformé en le culte des anthropomorphes sous l'influence méditerranéenne. En conséquence, la religion celtique survivait à l'époque romaine.

Pourquoi la culture gallo-romaine s'est formée? En Gaule, jusqu'au premier siècle de notre ère, les druides présidaient à la religion. Le sacrifice aux divinités était conduit par les druides. Le peuple commençait de plus en plus à dédier directement les inscriptions votives aux divinités. De ce fait, les druides perdaient de leur pouvoir et le public préservait la religion. La continuation de la religion celtique signifie que la tradition celtique était conservée, parce que la religion et la

société étaient connexes dans la société celtique. Il en résulte que la tradition celtique s'est mélangée et unifiée avec les coutumes romaines. C'est la raison pour laquelle la culture gallo-romaine s'est formée.

The Editing of Hu Guang 胡広's *Hanguan jiegu* 漢官解詁:
Its Circumstances and Conceptual Framework

by

SATO Tatsuro

This article deals with Hu Guan 胡広's *Hanguan jiegu* 漢官解詁, one of the primary written sources used in researching the institutional history of the Han Dynasty, investigates its conceptual framework and the motivation for its production as well as those of three of its predecessors, thereby revealing the political and cultural background and their transformation in the Late Han, and also considers the reasons for and historical significance of the sudden emergence of similar writings regarding the bureaucracy during the period of transition from end of the Later Han Dynasty to the Six Dynasties.

The article, first, deals with the *Hanguan pian* 漢官篇 of Wan Long 王隆, which served as the basis for the *Hanguan jiegu*, and points out that the *Hanguan pian*, which covers the entire Han bureaucracy in elegant language, offered Hu Guang suitable raw material for his work. Next, the article takes up Liu Zhen 劉珍's *Hanjia liyi* 漢家禮儀 and Zhang Heng 張衡's *Zhouguan jieshuo* 周官解說 in order of their production and shows the following points: one, they attempted to describe the bureaucracy of the Han in light of the description of the bureaucracy in the *Zhouli* 周禮, thereby idealizing it. Second, through these works, the authors sought to spur the reorganization of the contemporary, disorganized political realm and to revive the decaying dynasty. Following in this tradition, the *Hanguan jiegu* tends to describe the history and details of the bureaucracy of the Han Dynasty objectively rather than describe it in terms of the Confucian classics and idealize it. This tendency was a reflection of Hu Guang's conservative political attitude and his scholarly stance based in *Guwen xue* 古文學 (the movement to study the classics written in the ancient characters), which was the leading trend in the scholarly circles of the day. Such an objective description of the bureaucracy